



阿安永実録

八

~ 13  
3362  
5



13  
3362  
5

二十五  
貸仕書屋  
本卯行機

茶磯榮

新  
安永  
実録  
徳巻のふ

大正十年八月廿九日  
本大學出版部

目録

一 坊敷十六名への田中左衛門と晴行せむらの交

一 松平阿波守左衛門と榎の半はん

一 孫権田九郎左衛門と及第の交

世に中なる人など

うすほど  
らんいあ

色うくやあきく

末さあくるる

大右の左件と原系

湖安水実疎地養のあ

佐良右左の田伴左件と佐野の

杉平河波も左の換使のり

并福田九郎を福の奴の文

左極り佐良右左の己の悪

藤氏の世と田中左件おる

りれ好小男牙明智の田中左件

かしもしくくくの本ひかく

波之此築山成勢一々水の隈  
舟を置る心微極くすましく  
以勢をたふる一勢舟のり  
くふの舟をて回中友伴の感  
あして心微也西の舟をて人  
友の友伴の志一とくむく  
の舟をて友友の舟をて大のひ  
うみ懐り回中友伴の感勢と案

それくく粒く遠根に遠根  
とく波波の感極くりこれ  
さゆきさく高徳たふし金  
回中友伴と人志をす付果さ  
んてさゆく思深とよさる  
奇れくく高徳もくさく  
自らの舟の友伴の志  
まの業くく回中友伴の志

17  
奮りた伴と討果して平懐  
と進しあつて居りて母と  
あつてあつた以の御がぶく  
いひ進りつり居るに世あつた  
助くいふた伴り居るの百姓  
所あつて居る者の伴成り  
村の守役として居る  
あつて居る本居りて成りて居る

18  
取つて居るの百姓は  
皆く地方めて宛行の事  
の爲に皆百姓持之儀と申る  
少者の親ひあつて居りて  
そ村の爲に割守成村  
何んげ村と幾人ゝ居り  
かしてお役と御本居り  
合衆成りのふ居りて居る

ふまゝの老に終金とありて 方後と初  
さすも本ありし中ふ今此の  
も物没の番にありて人となら  
むまの余力もあらず水は自  
れ是と初るもあらず津糸  
ありしものありて 四件左件が乗ふ  
ふありしはら 出候しう今  
師ありし 養女とありし一

多し左件とありて 養女とあり  
よの進退とありて 候ふら紙  
ありしとありて 名乗らんと合せ  
しとせむありて  
御ありし波に御師ありしとあり  
し養女とありし 小徳友とありし  
れ功とありし 候し進退とあり  
し果た左件生をてし 候し

出せの物すへきるわん  
我まの本懐と違へて  
申あつては川あきか  
あま永く兄弟の縁  
て首長く申あつて  
とくはわん我の親  
とくはわん我の親

毎まともの人  
親の夫あり  
くみと書平  
を何ととら  
との山わん  
体子の史  
親志一  
世のめり

も引葉月して中らんしき  
世よりかそらうしきの中を  
らひの香とりし中を先妻  
御も切きこしに及く我は  
かううと物の末も切し故  
いし後流る見送るるわさ  
うしきすきら我しりし  
何う大なる事な負せ成す

拙又母の成すせふ高村穂登  
御のふたつよのあれは行末親  
里より我しきとて毎々我業  
いんのもう成すしきわらわ  
まが下ららのあたまは後の業  
死にたのしきんし婦る去んす  
のふれ御友ちたつよも引葉月  
してままたと討せんしと知る





まゝしゆらゆらも十二日ゆらも春  
あきくしてきく霞のたぐひを  
無<sup>く</sup>郷<sup>の</sup>名<sup>を</sup>別<sup>と</sup>知<sup>ら</sup>ず人<sup>の</sup>心<sup>を</sup>  
つら<sup>す</sup>今<sup>我</sup>り<sup>事</sup>々<sup>く</sup>  
早<sup>小</sup>完<sup>く</sup>あ<sup>す</sup>す<sup>く</sup>忘<sup>却</sup>も<sup>と</sup>  
す<sup>す</sup>世<sup>も</sup>く<sup>く</sup>南<sup>対</sup>も<sup>れ</sup>  
は<sup>き</sup>も<sup>も</sup>院<sup>長</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>  
い<sup>ら</sup>ふ<sup>の</sup>心<sup>小</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>物<sup>次</sup>も<sup>も</sup>

まゝみくして南<sup>の</sup>心<sup>の</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>  
して<sup>は</sup>心<sup>の</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>心</sup>も<sup>も</sup>  
か<sup>え</sup>東<sup>の</sup>心<sup>の</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>  
す<sup>心</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>  
し<sup>は</sup>心<sup>の</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>  
く<sup>も</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>  
し<sup>は</sup>心<sup>の</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>  
あ<sup>ま</sup>の<sup>心</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>  
あ<sup>ま</sup>の<sup>心</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>

かきし 秋すしやして 浮世の物  
いふもごとしと 早やあて 院  
我道也 して 秋のゆく 縁  
之 誰き 秋の 度と 院 中  
きと 華 一 故 新 城  
つ 入 葉 何 あり とも の 人 大 遠 可  
この 葉 山 妻 氏 とも の 橋 の 山  
我 葉 何 と あり とも の 人 大 遠 可

女房娘と 集りて 翁を 揚れ  
若夫と 撰りて 法理 出 舞  
音の 心 一 一 一 一 一 一 一  
の 秋 一 一 一 一 一 一 一  
ん 心 と 一 一 一 一 一 一 一  
少 老 の 悲 一 一 一 一 一 一 一  
誰 心 一 一 一 一 一 一 一  
或 心 一 一 一 一 一 一 一

信行渡也のりあしと多数ゆれ  
君といさしひのひきんも  
依とあつての國を鶴せん事と能  
指回りの月夜お郎り杖りの  
君の橋をといさしひも青溪種  
くのと急ごととつて教条辛者  
しと君ふ海をいと能れも  
橋をさうんのまきと本く勢急

小たの虫うんくさる樹を却て以  
に逆ましくす入り事く依て我さ  
もいさしひもさうひおふれ  
事ふくさるく能えとつてた  
の二つ舟一珠ふせの辛者いそ  
小進能く一能に我も一醫者  
さうして此せふ非以渡能見  
能えとる人もゆきし能く付を

信行神智ののれも何とゆ  
とふゆつらん下とくは終あ  
の初礼とも或きこり  
父の遺訓と守り我死し  
君に志貞と守りト万民の  
と故き燭のく君に  
してあの悲ひ被ひ君の  
故きく我もく人も多

忠むむ乃小ゆふらん  
故終せは古終めし  
身は美ありきこの  
とゆす我意む西路の  
一旦人の春春めす  
終あはまは是と  
死は夫を  
と物又物智信行

魚鱗とみと一日利運り天竺の  
天子は是とわくみくそ藤の  
能くそは禪とていふはあはれ  
志も心ありわくそはけり  
しるぬは種子をみだす涙と流  
みよめらひんうもそ本との  
りよりの年々業力つあはれ  
や追討使来とゆりてまかり

花ぬも老方おまき事せむ  
百一とありぬもそ業  
父の心教訓しそる名神伝へ  
さくは修行物智の末の  
た業父ふありそる君の心例  
付添と敬とそるす下し心  
く心もあはれと流るおまの  
子抱ありて天竺しそる

お庭と申すは回春た体大ひり  
もうこひ通く我々の親と申す  
いりとも思ひあすしきと秋ま  
婦の長あしとありしは親親と  
して教訓しるるがゆゑ母親七  
年七月十三日回春た体をお前  
と申す親とてに今物り  
系力もより一轉小食なりもた

よりとてかきし御く我病  
申すは聖賢の事も急なり  
今自孝といひ秋もふしは母  
た先祖の事をお前してを是と  
申すもふしし今我死  
まらしも是なりと急く  
ありし先祖の事急なりこれ  
はを思ふは我病氣も年愈と

海にいと父のよきものいふくみ所  
ゆりくしといふ事先祖の事  
系治して父の病氣寺の和名  
祈禱の中も頼まんて七月十三日  
のいつ時迄寺まゝしりるがえ東  
田中た伴ハ徳治の生れおれぬ  
且那寺ハ徳治の寺阿安樂寺と  
ソノ寺ハ高野大長院に付て大長

くふ徳治ハ三三の年のうみれ  
まゝりてゆり後々徳治入徳治  
おれりハ船と長運りて一といひ  
それハまゝお祈りて一といひ  
の以てお祈りて一といひ  
いひ徳治ハ一といひ  
七年とて一といひ  
人長運りて寺まゝりあをて出り







も長成法ひ名の妻りくはるが  
如く小進ゆりしは敬ふ不敬の大  
なる徳福やいん比真とや子  
母まの己も遠祖の何るなりとた  
伴の世氣と心とくはるまふ  
て揚負とらむたに田中と伴と  
賢父と母とくして世のくはる  
おま——のゆおまひの

揚負つらるる徳と初めはる  
とらひ持ふ妻子の國守の月と  
今して申るは物と心と業ととさ  
せて陳ふ是し徳と心と業ととさ  
るる——物と心と業ととさ  
志のれた母と心と業ととさ  
おん——心と業ととさ  
は唯一の心と業ととさ



死にたつるはるに彼本名は  
大なる放りてくつり  
うらむ帯せし銀と後  
とせありし中道人教の  
ゆきし我ありし水  
あの老老大のに警  
ゆきしと提我し  
是とこれと左体  
はるに彼本名は

死にたつるはるに彼本名は  
大なる放りてくつり  
うらむ帯せし銀と後  
とせありし中道人教の  
ゆきし我ありし水  
あの老老大のに警  
ゆきしと提我し  
是とこれと左体  
はるに彼本名は

の色は〜  
泣か〜  
きり入〜  
能く〜  
か〜  
〜  
のは業〜  
〜  
〜

〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

持小女房の軍の討て方一玉掛り。  
田中左伴成しつ傳左衛門母相成  
少く去の小警まゝお來り是とて  
去のに被息しつるがかりに討先急  
き伴定お前と逢ひおきまゝ一隊  
ありし左伴が教まゝれしつるが  
とて一隊たりて是とておのれ  
在ふしつる能く急まゝなり

光東のしつ傳左衛門母相成  
新しつ傳左衛門の來りしつるが  
しつ傳左衛門の來りしつるが  
とて千の老現万の來りしつるが  
逢ひと逢ひしつるが  
傳左衛門の來りしつるが  
逢ひしつるが  
逢ひしつるが







ら〜身とめん〜指さう〜さま  
所を対物〜も〜あま指さう〜友  
我〜とゆられ〜子細〜めん  
言りて〜目子〜のよに〜成て教され  
去り〜の〜〜中〜身の指  
小〜と〜成〜指さう〜わが母親も実  
を〜とゆられ〜〜とゆられ〜  
由方〜う〜指さう〜ゆ〜とゆられ〜

大ひふ指さう〜指さう〜とゆられ〜  
子細も〜とゆられ〜とゆられ〜我指さう  
ゆ〜とゆられ〜ゆ〜とゆられ〜ゆ〜とゆられ〜  
友伴〜とゆられ〜とゆられ〜とゆられ〜  
つ〜とゆられ〜とゆられ〜とゆられ〜  
ゆ〜とゆられ〜ゆ〜とゆられ〜ゆ〜とゆられ〜  
さ〜とゆられ〜さ〜とゆられ〜さ〜とゆられ〜  
の〜とゆられ〜の〜とゆられ〜の〜とゆられ〜

あめと投とて傳たつて例に之あり  
りねの傳た集つて下男の只物とて人て  
わの傳た後とて傳たつて天の物  
初もゆとす投とてそ我の三方の  
あまふと且ねと教とれ教の初と  
見しつらつて何の目もあ令せん死  
ての心との心伝とて心とて振とて  
と振とねの傳たつてあひのつて  
て

子細もつて伝お果あつて何れ  
うに伝たつてつとつて親の  
主人ふねとて伝たつてあめと  
うとつてつとつて子細と伝たつて  
とせつて伝たつてつとつて伝たつて  
の伝たつてつとつてつとつて伝たつて  
つとつてつとつてつとつて伝たつて  
つとつてつとつてつとつて伝たつて

の形もんを度目自のしと終りて  
新子の老なるをく歯くことあり  
世の本と形とを運のまあるりあり  
今日と終りてまの相違もらう  
我くととらりて先程の客来り思  
先程の客来り思  
中し母親の終りてお終りて我ま  
後をいふお命していりせん

東葉の体とせんと思ふ自書し  
わがんくちのお書きとて  
悴まの所におに抱付らるるに  
おくうらうとて秋の車のお  
とや秋もた体は悴と終りて  
とてと眼とていりて  
洗くると後とてんて信たつ  
とてと体は悴とてとてと母親の

とあると云ふは、その四件左件は女房先  
づきより身は比島末路の張と云ふ能と  
付てきよ路のあきや伴之を所と  
あ便よりいふとやと云ふは、本に記す  
件り女房のいふ事と云ふは、流の流  
せしころよりいふ事と云ふは、女房も我全  
の書款と付てある事と云ふは、所いさ  
ありと云ふは、川之出申取入と云ふは、

ハ流の流の事といふは、いふは、女房先  
小徳と流流小徳と云ふは、流と云ふは、  
中と云ふは、女房先と云ふは、流と云ふは、  
まはら公のいふ事といふは、四件左件以上  
の事といふは、物又箱回九所を流の  
後捕の事といふは、物と云ふは、流と云ふは、  
ものより流の事といふは、物と云ふは、流と云ふは、  
物と云ふは、物と云ふは、物と云ふは、

いそぐ世修おとこのくまきやま  
かと添て秋の村せゆす  
さむく利書と流と親子と  
いのおくは隠れ重名と  
梅屋くして秋夜古風つ  
物に遊遊来りて左件に死能と  
らさるる事と咽とあくる  
報後とさるるゆき報後と

物さゆりつねに世修大なるはく  
くはとんてこぬか殺せし  
さむくはくはくはくはくはく  
よせよ世修と秋の老と  
のあつらふも殺す事と実と  
いそぐ世修おとこのくまきやま  
かと添て秋の村せゆす  
さむく利書と流と親子と  
いのおくは隠れ重名と  
梅屋くして秋夜古風つ  
物に遊遊来りて左件に死能と  
らさるる事と咽とあくる  
報後とさるるゆき報後と

多々所親子の慈傳を以て入るは  
其の重きを以てとすも其の  
る親子たる親を以てりるは  
とありて因果とありて慈傳  
能とせざるありて其の慈の心  
とありてとこも其の慈を以て  
られとて其の慈を以て慈傳  
新のくも其の慈を以て慈傳

滝無非の依るを以て慈と  
ざるは其の慈を以て慈傳  
老無と目し其の慈を以て慈傳  
其の慈を以て慈傳とありて  
また福田とありて慈傳とありて  
其の慈を以て慈傳とありて  
其の慈を以て慈傳とありて  
其の慈を以て慈傳とありて  
其の慈を以て慈傳とありて



而書かれた件病中といひこゝに  
新子の者の身系り物又辨別限り  
限りて本名以初る者限り系り  
次といひか巻小指子のよき所と  
考ふ又読みしは是金と  
赤月の者に月影とてハ子葉  
のそれ系り括つてとてと祖を  
いひていひて括るるは限り也

流石一老なる福田北所を流し  
眼力とて感ふ人々も是等の  
於り極る正徳徳大守活眼と  
も後使して井上教る者同  
身人五人代来りて死難とゆ  
この本の極子といふは書とゆ  
智の事の進てゆゆとて  
ころに中かゝりて名く立ゆり



時小指田丸所を請ふ所の御き下  
取め申す本為以御と申出  
之方本回体在体命のら  
名和とそしるうし 祇元  
子乃下之依く忠堂と  
二十石小三人所持宛行ひ桑良社  
小一物又七糸のみも糸と糸子  
出情して御子としるうし 依く

十二石小二人所持久糸の  
組是控小良法之しるうし 中  
下女持換命の申す三人所持づ  
名考し 内三人の申す持た  
申す方一良法之しるうし 月或人の加  
長つしるうし 良法之しるうし 又小  
しるうし 己分の忠堂と申す  
以脚より皆く申す小指

敬小美加ふ叶ひ一以東の主人の  
款も討取す以詰めも何くも不  
小の心過らうの以忠賞くそあ難き  
法合く一以文中とよりねの箱田の  
死ふの世の業と同方あては運河  
んこそねねの本るの胸抱くを  
畏るしやうのあし一わくし業師ホ  
も均しちゆとよせえま昔時

の喉乞の申一捨り多  
りねが是とすて美をく業が終  
但せりねの心抱びいなきた屋  
かのくをりりねとね終り  
りねの師こしき大の小説の我  
あつと少集り友伴と教と終るハ  
我の百集大成一とらふはは  
友伴と教と終る一とらふは

とや出世果るを待たずありし彼  
音縁とのあはれし人ありし  
海と波とをみればあはれと惜と為  
後りしる玉の依りてあはれと為  
り帯ぬるうとてすてたはひ不飲ひ  
これあはれしとてすてたはひ不飲ひ  
とも今も色に引ぬれば却て不書  
かるとしてせんと思ひし不書ひ

故う不瀬田の目鏡とものして  
分の忠告と宛汗のうめあはれ  
不飲ひものあはれ 却て賞與しる  
可成ゆき遠しとてあはれ大井上  
ゆきと波と瀬田の縁最と  
生補とのあはれとてあはれ  
らんあはれとてあはれ

あはれ

賞與

